

平成25年
7月



自転車文化センター 友の会だより



夏の号
第23号



友の会会員限定！ 閉架図書 自由閲覧会(8/10~18)

自転車文化センターでは、現在、日本語の図書・外国語の図書並びに各国の雑誌の合本など約 8,800 冊を所蔵しています。自転車に関係した図書をまとめて収蔵している諸機関のなかでは、国内で最大です。現在、保存上の理由から、閉架式図書としております。今回友の会会員限定で自由に手にとり、見ていただける機会を設けましたので、ぜひこの機会をご利用ください。

期 間 平成25年8月10日(土)~18日(日) (9日間)
時 間 9:30~16:50 (最終入館 16:00)
場 所 科学技術館 2F 自転車文化センター情報室



- 受付カウンターにて、友の会会員証をご提示ください。
- 閉架図書コーナーへの所持品の持ち込みはご遠慮ください。
- 書棚から閲覧スペースに持ち出す際は、1度に3冊までとします。
- 返却はスタッフにお願いします。
- 図書の保存状態により、コピーができない場合がございます。
- 貴重図書の閲覧は保存状態を維持するため、自由閲覧から除外しております。

2013 自転車サマースクール(8/14、15)

日 時 平成25年8月14日(水)、15日(木) (2日間)
場 所 科学技術館2F ①②③北の丸サイクル/④自転車広場
参加費 無料(友の会会員でない方は、入館料が必要です)

	日 時	講 座 名	内 容
①	8/14(水) 10:00~11:00	自転車の乗り方教室 ~自転車に乗れるようになろう~	補助輪をはずして、自転車に乗りたいお子さんを対象に、乗り方のコツをお伝えします。 未就学児~小学高低学年/親子6組
②	8/14(水) 14:00~14:30	親子で学ぼう！ じてんしゃのルール	自転車に乗れるようになったお子さんと保護者の方を対象に、自転車のルールを学びましょう。 未就学児~小学校低学年/親子6組
③	8/15(木) 10:00~11:00	自転車を分解してみよう！	自転車を分解して、仕組みや役割を学ぼう！ 小学校高学年/2組
④	8/15(木) 14:00~15:00	戦前の日本の自転車事故防止 対策から学べること	明治期から昭和10年代までの戦前期における自転車事故の状況と、事故件数・事故割合を減少させた様々な事故防止対策を紹介し、そこから現代の自転車事故防止対策に活用できることは何かを考えます。 18歳以上/8名

【自転車サマースクール申込方法】

(1)申込代表者氏名、(2)参加者(全員の)氏名、年齢、(3)申込講座名、件名に「サマースクール参加申込」とご記入の上、Eメールでお申し込みください。bccask@jifu.jp
当センターより「お申込完了」の返信をもって申込完了となります。
(定員に満たない場合のみ当日受付も実施いたします)

錦絵から日本橋と自転車の歴史を探る

自転車文化センター学芸員 谷田貝一男

日本橋は徳川家康が征夷大將軍に任じられた慶長8年(1603年)に架橋され、翌年五街道の基点と定められました。その後度重なる火災で焼失しては架け替えが行われ、現代の日本橋は20代目に当たり、平成11年(1999年)に国の重要文化財に指定されました。

【東京日本橋繁栄之図 芳虎画 明治3年(1870年)】



描かれている日本橋は安政5年(1858年)に焼失し、同7年(1860年)に新架された木造で、明治6年(1873年)5月に架け替えられています。橋の中央部が両端より盛り上がっていますが、6年に架け替えられたときは木造ですが橋面は平面に変わっています。

錦絵には橋の南詰の石垣が築かれている所に設置されている高札場とその周辺の状況が主に描かれています。日本橋という地を幕府は統治政策のための広報活動の中心地の役割を持たせていました。その一つが高札場です。高札場とは府や領主の最も基本的な法令を書き記した木の札(高札)を掲示した施設で、多くの人々の目に触れるように、村の中心や主要な街道が交錯する交差点、橋詰めといった人通りの多い場所に設置されていました。今も「札の辻」の地名が各地に残っているのはそのなごりです。

高札場には大高札場と普通の高札場の2種類があります。大高札場は江戸ではこの日本橋南詰の他に常盤橋外、浅草橋内、筋違橋内、高輪大木戸、半蔵門外の6か所、普通の高札場は35か所ありました。この他にも6万を超える全国の村々にあまねく存在していました。日本橋南詰の高札場は石垣の上に置かれていますが、その他に芝土居を築いた上に置かれたり、竹や丸太を組んだ柵の中に置かれたりして厳重な管理が行われていました。

高札場の右隣に目安箱があります。この目安箱は明治元年(1868年)から同4年(1871年)まで設置されていました。箱やその中に入れられた訴状の管理は政府太政官が行っていましたが、箱に異常がないかといった箱の見守りは地元の人々が行っていましたが、目安箱はこの時期、日本橋の他に東京府庁表門、浅草見附、板橋宿、公議所、民部省、弾正台にも設置されていましたが、明治6年(1873年)までにすべて廃止されています。

この錦絵には目安箱の前に飛脚箱を担いだ町飛脚の姿の他、外国人らしき男が乗っている三輪車、人力車、馬車、大八車が描かれています。二輪車・三輪車の登場する錦絵としては初期のものといわれています。錦絵が描かれた明治3年(1870年)の4月に竹内寅次郎が東京府に自転車の製造販売許可申請を出しましたが、この文書の中に「自転車ト相唱候地車愚考イタシ」とあり、初めて「自転車」という言葉が使われています。明治3年の他の錦絵には「一人車」「壱人車」、明治3年8月の大阪府令には「西洋車」と名付けられています。しかし、翌4年(1871年)には二輪、三輪を問わず自転車と呼ばれるようになり、同5年(1872年)7月の大阪府取締令では「自転車」が使われています。すなわち交通史研究家の斎藤俊彦氏によると寅次郎の「自転車」という名称は商品でしたが明治4年(1871年)には「自転車」ということばが一般的な名称に転化したということです。

この寅次郎の自転車は明治11年(1878年)4月に寅次郎が製造再出願した際に東京府が工部省に提出した書類の中に「初メテ三輪ノ自転車ト名付ル者ヲ製造シ」と記載されていることから三輪車であったことがわかります。さらにこの三輪車は斎藤氏によると外国人が当時乗っていた一人乗り三輪車と似た点が極めて多く、この三輪車を模倣したものであると指摘しています。すなわち東京日本橋繁栄之図に描かれている三輪車とほぼ同じものが竹内寅次郎の手で製作され、自転車と名付けられたのです。

人力車は明治3年(1870年)3月に和泉要助、鈴木徳次郎、高山幸助の三名の連名で東京府に製造営業申請を行い、2日後に許可が下されました。以後保有台数が全国で急速に増加し、明治8年(1875年)に11万3921台、同29年(1896年)には21万688台に達しました。しかし乗合馬車、鉄道など新しい交通機関の普及によって29年を頂点として以後減少していきました。作画者の歌川芳虎(生没年不詳)は国芳の門人で、天保年間(1830~1843年)から明治20年頃(1887年)にかけて武者絵、役者大首絵の他、開化絵なども多く画いており、明治元年(1868年)の錦絵師番付では2位でした。

【東都新築日本橋之図 綱嶋亀画 明治44年(1911年)】



後述の「日本橋之真景」とは逆の南南東隅から北北西方向を眺めたようすを描いています。右上の塔のある2階建ての建築物の所有者は不明ですが、明治末に建てられ、関東大震災で倒壊したようです。

明治44年(1911年)4月3日正午に路面電車を止め、午後1時20分から開通式式典が始まりました。市長、内相、府知事等の祝辞後雨が降り出しました。式典後109歳の小島ふさが渡り初めの先頭に立ち、その後を10万人の群衆が押し寄せたとはいわれ、橋上で人が折り重なって倒れ、重軽傷者が出るほどでした。

「日本橋之真景」が橋と人物を強調して描いているのに対して、この「東都新築日本橋之図」は路面電車4台を正面に描いて強調しています。国私鉄が郊外から新橋、両国、御茶ノ水、上野までしか敷設されず、東西南北がまだつながっていない状況で、皇居を中心に北は上野、東は本所深川、南は品川、西は新宿まで張り巡らされている路面電車の路線網は東京市民にとって大きな移動手段でした。しかも飛び乗り飛び降り平気でやっていたということです。

自転車は中央下、左下、左中に3台描かれていますが、いずれもドロップ型ハンドルのレーサータイプです。本編で紹介している5枚の錦絵で唯一レーサータイプが描かれているのも、明治44年(1911年)頃は自転車競走が人気を博していたときだからです。

日本の自転車レースの歴史を振り返ると、レース状況がある程度分かる記録として残っているもので最初のレースは明治28年(1885年)7月に横浜の外国人居留地内のクリケットグラウンドで開催されたトラックレースです。ロードレースは明治29年(1896年)2月に横浜から国府津まで東海道をを使って開催されたのが最初です。明治31年(1898年)には上野不忍池畔でトラックレースの第1回内外連合自転車競走運動会が開催されました。以降不忍池畔や本所グラウンド、大阪の住吉公園、桜宮をはじめ各地で競走会が開かれましたが、明治38年(1905年)ころから報知新聞・時事新報・二六新報・万朝報などの新聞各社が自転車競走を主催するようになり、またレースで優勝した選手の所属した自転車の銘柄が売れたなどから自転車レースは日を追って人気が高まり、新聞記事でも大きく取り上げるようになりました。さらに明治43年(1910年)に東京輪士会がレース規定を明文化しました。

作画者の綱嶋亀に関して、生没年を含め詳細はわかりません。

【日本橋之真景 作画者不明 明治44年(1911年)】



明治41年(1908年)に現代の日本橋の建設が始まり、同44年(1911年)3月28日に完成、4月3日に開通式を挙りました。石造で橋中央部に橋脚があり、その左右にアーチ橋が2連になっているルネッサンス式で、設計は東京市技師の米元晋一と樺島正義、装飾と様式は大蔵省建築部の妻木瀬黄が行いました。橋脚部の上に続く親柱にはガス灯が設置され、その基部には彫刻家の渡辺長男の作による歯車を持った獅子と羽を広げた麒麟が鎮座しています。

この錦絵は日本橋の北東隅から南西方向を眺めたようすを描いています。橋の左手前に慶長以来の魚河岸があり、関東大震災後に築地に移るまで、市民の台所を一手に引き

受けていました。その魚河岸の帰りだろう姿が見られます。向こう側の白いビルは英和辞典などの発行を行っていた大倉書店です。

橋の中央に路面電車が通り始めたのは明治36年(1903年)で、東京電車鉄道が品川から上野を結んで走っていました。当時の東京の路面電車はこの他に東京電気鉄道と東京市街鉄道の3社がありました。この路面電車が通るまでは歩行者のためのガードレールがありましたが、路面電車の開通とともに撤去されてしまいました。

軍人らしき人物が乗っている自転車が1台描かれています。この錦絵が描かれた明治44年には国内自転車メーカーとして宮田製作所、東洋商会、岡本鉄工所、ゼブラ自転車製作所その他、各種部品メーカーも次々と設立されていました。しかしその生産量は輸入台数と比較するとわずかなものでした。明治43年(1910年)の国内の保有台数23万9474台に対してイギリスからの輸入台数1万8649台(明治35年からの累積輸入台数10万9917台)、アメリカからの輸入台数1002台(明治35年からの累積輸入台数6万7896台)でしたから、この軍人が乗っている自転車も輸入車であったと考えられます。

なお右上に帝国座として描かれている建物は石造の日本橋が誕生したときと同じ年の3月1日に渋沢栄一、大倉喜八郎らによって日本初の洋式劇場として開業した、現在の丸の内3丁目にある帝国劇場です。

【日本橋之真景 浦野銀次郎画 大正7年(1918年)】



明治44年(1911年)発行の「日本橋之真景」を模写したものです。したがって馬車が人力車に変わり、人物も一部が変わっている以外、全体の構図等は同じです。明治から大正、昭和にかけて東京見物のおみやげとしてこのような額絵とよばれるものが良く売れました。絵の出来も原画と比べてうまいとは言い難く、廉価版であったと思われます。

大正7年(1918年)の自転車保有台数は125万8000台で前年から21万5120台増加しています。その一方で輸入台数は同6年(1917年)で877台にすぎませんでした。したがっ

てこのときに新たに保有された自転車は国産であるといえます。 作画者の浦野銀次郎に関して、生没年を含め詳細はわかりません。

【東京名所 日本橋繁華之光景 土屋傳画 昭和7年(1932年)】



この錦絵も発行は昭和7年(1932年)ですが、大正15年(1926年)に発行された土屋傳の「日本橋繁華之光景」とまったく同じものです。すなわち大正15年の版を使って昭和7年に印刷したものです。またこの錦絵とそっくりな描法と構図で関東大震災時の日本橋付近を描いたものとして「日本橋より魚河岸及三越呉服店付近延焼」もあります。震災の3年後に描かれたため、明るく華やかな近代都市風景と震災からの復興の歡びが込められています。

正面左の煉瓦造りで屋上に日の丸の立っている緑青のドームを頂いたビルが旧帝国製麻本社ビルです。東京駅を設計した辰野金吾の設計で大正2年に竣工しましたが昭和62年に取り壊されました。その背後の高塔に旗のひるがえっているのが三越呉服店本店です。関東大震災で焼失した後、6年

の歳月をかけて増改築され、昭和10年(1935年)に現在の本館に生まれ変わっています。その手前の旧帝国製麻本社ビルと三越呉服店本店に挟まれた5階建てが日本で最初のエスカレーター、エレベーター、スプリンクラーが設置された横河民輔と中村伝治の設計による三越本店新館で、大正3年(1914年)に完成しました。

この錦絵には路面電車5台、自動車3台、自動自転車(オートバイ)1台、自転車2台、人力車1台、荷車2台、舟4台とさまざまな輸送形態が描かれています。原版が大正15年ですから、この年における各種車両の保有台数をみると自転車437万0959台(大正10年と比較して1.9倍205万1870台増加)、自動車5万1108台(大正10年と比較して3.9倍の6万0736台増加)、自動自転車は大正14年で1万1582台(大正10年と比較して3.4倍8160台増加)、人力車6万1949台(大正10年と比較して0.6倍4万4912台減少)、荷車215万2553台(大正10年と比較して0.9倍5万0853台減少)です。また東京市内における交通機関別利用割合は路面電車50.1%・国私鉄41.9%です。こうした各種車両の保有台数等の普及状況が錦絵に描かれている台数に反映されていることがわかります。

	東京日本橋繁華之図 明治3年	東都新築日本橋之図 明治44年	日本橋之真景 明治44年	日本橋之真景 大正7年	日本橋繁華之光景 大正15年
自転車	1	4	1	1	2
自動車	0	2	1	1	3
自動自転車	0	0	0	0	1
路面電車	0	4	1	2	5
人力車	2	5	0	1	1
馬車	1	1	1	0	0

自転車の保有台数は昭和17年(1942年)まで増加を続けましたが、1年間における増加台数は大正13年(1924年)から同14年(1925年)の間が69万4641台で最高でした。

作画者の土屋傳は主に役者絵を画いていたようですが、生没年を含め詳細はわかりません。

(参考文献) 日本橋・八重洲・京橋かいわい <http://www.ynp21.jp/archive/index.html>
 コトバンク高札場 <http://kotobank.jp/word/%E9%AB%98%E6%9C%AD%E5%A0%B4>
 「日本における自転車の製造・販売の始め」 斎藤俊彦 1985年
 「人力車」 斎藤俊彦 1979年
 「自転車の一世紀」 自転車産業振興協会 1973年
 「明治世相編年辞典」 朝倉治彦・稲村徹元 1965年
 三越 歴史 <http://www.mitsukoshi.co.jp/corp/history.html>
 江戸東京博物館 <http://www.edo-tokyo-museum.or.jp/exhibition/special/>
 「道路交通政策史概観」 道路交通問題研究会 2002年

特別展示のご案内

「安心・安全な自転車利用 ～街中の通行状況をチェックしてみよう～」展

期 間 平成25年7月20日(土)～9月29日(日)
場 所 科学技術館2F(自転車文化センター情報室)
時 間 9:30～16:50(入館は 16:00 まで)



右側通行・並進は危険です。

街の中を見渡すと、自転車の傍若無人ぶりが目に付きます。車道での右側通行、歩道での歩行者を押しよけての通行、赤信号など無関係。さらにはスマホを見たり、雨傘や日傘を差したり、ヘッドホンをつけたりしてのいわゆる「ながら」運転等々。これでは交通事故全体に対する自転車事故の割合は減りませんね。事実、東京では平成19年35%に対して24年36%とわずかながら上昇しているのです。

どうしたら自転車事故の占める割合を減らすことが出来るのでしょうか。東京での事故状況を見ると発生場所は交差点並びに交差点付近が全体の72%、発生状況は出会い頭が50%、これに左右折時を含めると71%になります。

つまり交差点付近での事故をなくすことが課題の1つともいえますが、なぜ交差点付近での事故が多いのでしょうか。「日頃通っている道だから安心・クルマや人がいないから安全」という思い込みによる運転による気持ちの緩み、「早く行きたい・漕ぎ出しが大変」だから「できるだけ止まりたくない」という自転車利用者の特性、そんなことが原因の1つでもあります。

今回の特別展示では明らかなルール違反の他に、思わず犯してしまった危険な通行と事故寸前のようなすなど、街中で見た様々な自転車の通行状況を写真で紹介します。これを見て、自分の日頃の通行状況を振り返ってみると、私もこんな危険な通行をしてしまっていると思われる人も多いと思います。

ぜひ自分の日頃の通行の様子を改めて振り返り、危険な通行とはどんなことかを再確認して、安全な通行を心がけてください。

【内容】 ①街中で見た様々な自転車通行状況の写真

②昭和初期から昭和40年代の自転車安全対策器具(鑑札・保障証ラベル・方向指示器など)

CYCLEPEDIA ICONIC BICYCLE DESIGN
JUNE 8 - SEPTEMBER 8, 2013

以前に友の会だよりでもご紹介した、自転車事典「サイクルペディア」。そのサイクルペディアの展示会が米オレゴン州ポートランド美術館で開かれています。現地を訪れた当センタースタッフが会場の模様を撮影して参りましたので、一部をご紹介します。



平成25年度第1回 自転車セミナー「オーダーフレームの世界へ」

7/25(木)18:00～ 講師 今野真一氏(今野製作所/自転車ショップ CHERUBIM 代表)

自転車の素晴らしさとは？ オーダーフレームとは？ 製作する喜びとは？ アメリカのハンドメイド自転車事情や工房で練り広げられる様々なドラマ。伝統と革新をキーワードに、新しい製品を世に送り出す工房「今野製作所」。いったいどんな想いで製品が製作されているのでしょうか。製作者側からみた自転車の素晴らしさを少しでも皆さんへ知って頂ければ、自転車の楽しみ方や付き合い方も変わってくるかもしれません！



<Profile> 1972年 東京生まれ。オーダー自転車を製作するブランド「ケルビム」メインビルダー。世界中のファンを虜にする彼のデザインする機能美溢れるフレームはもはや芸術の域まで達している。毎年、米国で開催される「世界ハンドメイドビルドショー」にて2012年に頂点を極める。その後、世界初の規模となる自転車専門学校(東京サイクルデザイン)のメインアドバイザーを努め若手育成にも精力的に活動している。著書には「自転車ビルダー入門」や、多くの連載もこなす日々を送っている。現在、東京青山にもアンテナショップをオープンさせオーダーフレームの新境地を開拓する新しい職人でもある。

日時 平成25年7月25日(木) 18:00～19:30(開場 17:30)・懇親会(希望者のみ) 19:30～20:30
場所 (一財)日本自転車普及協会 11F 会議室 (東京都港区赤坂 1-9-3)
参加費 セミナーのみ 1,000円/セミナー&懇親会 1,700円 *当日受付にてお支払いください。
申込み メールまたはFAXで、下記必要事項を記載の上、お申し込みください。
①名前、②電話番号、③FAX番号、④懇親会の参加 or 不参加、
⑤Eメールアドレス(今後セミナー等案内を希望する方)
申込先 Eメール:gyou2@jifu.jp FAX:03-3586-9782
問合せ先 (一財)日本自転車普及協会 Tel03-3586-3278 (平日 9:00～17:00)

親子で参加！自転車科学教室 9/22(日)「スポークの働きを調べよう！」

場所 科学技術館2F(北ノ丸サイクル)
時間 各日2回 ①11:30～/②13:00～(約20分)
参加費 無料(科学技術館の入場料は必要となります。)
当日、2F北ノ丸サイクル前にて整理券をお配りします。
定員 各回6組(先着順)



自転車は2つの車輪が回転して前に進みます。その2つの車輪にはスポークと呼ばれる細い金属の棒が、ハブと呼ばれる中心部からタイヤの内側にあるリムと呼ばれる金属の輪に伸びています。このスポークの本数を数えたことがありますか。多くの自転車には前輪と後輪のそれぞれに36本があり、互いに複雑に交差するように付いています。

この細いスポークは一体何のために付いているのでしょうか？それを確かめるために、スポークにも太さの違いがあるのか？スポークの本数を減らしてみると自転車はちゃんと進むのか？スポークの付け方を変えたらどうなるのか？このような簡単な実験を行い、スポークの働きを調べてみます。

友の会会員限定
プレゼント

TOJ個人総合優勝 F.バリアー二選手の
サイン入りTシャツを1名様にプレゼント！

5月に開催されたツアー・オブ・ジャパンで、個人総合2連覇を果たした、F.バリアー二選手(チームNIPPO・テローザ)のサイン入りTシャツ(Lサイズ)を1名様にプレゼントします！

【応募方法】 ①〒住所、②氏名、③電話番号、「友の会プレゼント係」と明記のうえ、Eメール、FAX、はがきのいずれかで、ご応募ください。(8/20必着)

◎Eメール bccask@jifu.jp
◎FAX 03-5224-4558
◎はがき 〒102-0091 東京都千代田区北の丸公園2-1 科学技術館 2F
自転車文化センター「友の会プレゼント」係



*当選者の発表は、発送をもって、かえさせていただきます。

新着図書の紹介

- 「自転車の教科書 やまめの学校公式ガイドブック」(堂城賢著/小学館)
「自転車コミュニティビジネス エコに楽しく地域を変える」(近藤隆二郎編著/学芸出版社)
「風を切って走れ!!クロスバイク最新購入ガイド 2013 年上半期主要最新モデルを網羅!!」(コスミック出版)
「折りたたみ自転車&スモールバイクカタログ 2013 欲しい!が見つかる小径車選びの必読本!」(辰巳出版)
「クロスバイク DIY BOOK」(柘出版社)
「スポーツサイクルカタログ 2013 トライアスロン&TT」(八重洲出版)
「Pen いま欲しいのは、美しい自転車。」(阪急コミュニケーションズ)
「交通事故における過失相殺率 自転車・駐車場事故を中心に」(伊藤秀城著/日本加除出版)
「スポーツサイクルカタログ 2013 クロスバイク/MTB」(八重洲出版)
「キアズマ」(近藤史恵著/新潮社)
「シークレット・レース ツール・ド・フランスの知られざる内幕」(TAMILTON Dコル著/小学館)
「電動アシスト自転車最新購入ガイド 2013 年の最新・人気モデルが勢揃い!!」(コスミック出版)
「LOOP Magazine 温故知新のヴィンテージ自転車イシュー vol.16」(三栄書房)
「自転車と旅 特集:もっと楽しむ、もっと遊べる!自転車「遊び方」大全 vol.10」(実業之日本社)
「クロスバイク&ミニベロ 2013 モデルカタログ おしゃれな自転車ライフを楽しもう!」(マガジンボックス)
「北海道 16 の自転車の旅」(長谷川哲著/北海道新聞社)
「自転車日和 スタートするならこの季節がサイコー!! vol.28」(辰巳出版)
「MTB 日和 vol.14 初心者応援大特集!! MTB 基礎講座 Q&A」(辰巳出版)
「MTB 日和 vol.15 これこそが醍醐味!! 下りを楽しむ!!」(辰巳出版)



●自転車文化センターは、来春2014年、移転・リニューアルオープンします●

自転車文化センターは、来春、目黒駅徒歩5分の場所に、リニューアルオープンすることが決まりました。スタッフ一同、新たなサービスの向上を目指していきたいと思っております。今後とも変わらぬお引き立てのほど、よろしくお願い申し上げます。なお詳細につきましては、あらためてホームページ、友の会だよりで、ご案内いたします。

自転車文化センター 友の会だより 夏の号 (第23号)

平成25年7月18日発行



一般財団法人日本自転車普及協会 自転車文化センター
〒102-0091

東京都千代田区北の丸公園2-1 科学技術館内

TEL: 03 (3217) 1231

FAX: 03 (5224) 4558

E-mail: bccask@jifu.jp

URL: www.cycle-info.bpaj.or.jp

自転車文化センターは、競輪の補助を受けて事業を行っております。

